

日本社会福祉学会第 69 回秋季大会学会企画セッション
社会福祉学における研究方法論を考える
～量的研究と質的研究の背景にある考え方を探る～

縦断調査に基づく量的研究の考え方と社会福祉学における方向性

東京都立大学都市環境学部
都市政策科学科 杉原陽子

社会福祉分野においても科学的根拠に基づく政策や実践が求められている。科学的根拠を得るには、着目する現象を科学的な手法を用いて把握・分析し、それにより得られた複数の知見を総合的に考察する必要がある。現象を科学的に把握・分析する方法はさまざまな観点から分類できるが、データの特性和それに伴う分析方法の違いに着目すると、量的研究と質的研究に大別される。

量的研究は、現象を定量的に把握し、統計手法を用いた分析により知見を得るものである。分析における客観性は確保されやすいが、現象を数値化して統計解析にかけるため情報が単純化されやすく、複雑な現象の詳細を理解しにくいという難点がある。さらに、分析者が事前に仮説や分析枠組みを設定し、それに基づいて情報を収集するため、事前に想定できなかった現象を捉えるには限界がある。

質的研究は、数値化しにくい現象を把握し、分析者の主体的解釈を活用して知見を得るものである。対象者の意図や思考を深く理解し、それらを概念化するとともに、新たな仮説生成を試みる研究が多い。統計解析で捉えきれない現象やその意味を把握することができるが、客観性に欠けるとの批判や分析者の力量に結果が強く依存するといった難点がある。それぞれ長所短所があるため、量的研究と質的研究は互いに補完しあい、両者の知見を統合することで、より深く現象を理解することができる。

本報告は量的研究について述べるが、量的研究もいくつかの観点から分類できる。特に研究目的が「変化」を把握・分析しようとするものか否かによって、研究デザインが大きく異なる。現象の変化を分析しようとする場合、研究対象を 1 時点のみ調査する「横断調査」では変化を把握できないため、複数時点にわたって情報を収集する「縦断調査」を行わなければならない。政策やプログラム、実践等を評価したり、因果関係を推定する際には「変化」を把握する必要がある。そこで、本報告では量的研究の中でも特に縦断調査について基本的な考え方と方向性を概説する。

初めに、縦断調査の主な類型（トレンド調査、コーホート調査、パネル調査など）の特色を述べる。次いで、変化の原因を探る上で、加齢効果、コーホート効果、時代効果の混同に留意しなければならないため、どの調査で、どのような混同が生じやすいのかを解説する。さらに、変化をもたらす要因との因果関係を立証するために、疫学研究で示されている因果関係の評価プロセスと判定要件等を紹介する。これらの基本的な考え方を踏まえた後、縦断調査で明らかにできる点として、集団の平均的な変化の把握、変化の個人差とその要因の推定、プログラムの効果評価について事例を交えて紹介する。最後に、実施上の課題と社会福祉学において期待される方向性を述べる。